ことぶき「なか」だより
No.175
2016.6.

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka@church.jp　http://church.jp/naka/
発行者　石倉夕子　（題字　松橋 順）

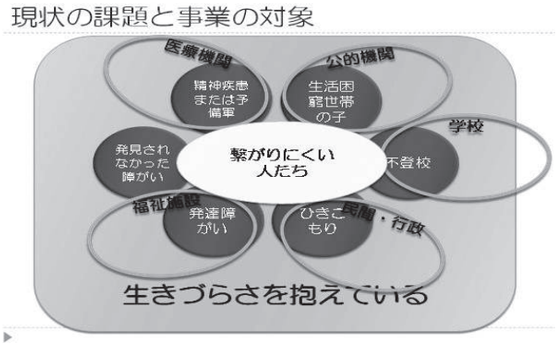
宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

精神疾患や発達障がいの狭間にいる若者の就学・就労を目指した自立支援

ＮＰＯ法人横浜メンタルサービスネットワーク　代表
鈴木　弘美　さんに聞く

なか伝道所のメンバーであり、ＮＰＯ法人横浜メンタルサービスネットワーク代表として、公の制度からもれてしまった若者に寄り添ってこられた鈴木弘美さんに、新しい若者支援の取り組みを伺いました。



ＮＰＯ法人横浜メンタルサービスネットワークは二〇〇一年に設立し、一六年目に入ったところです。法人のビジョンとしては「①すべての生活者が生きやすくなるように、新しいヒューマンサービスを地域につくっていく」というのが一つの目的です。そして、「②ネットワークを大切にし、保健、医療、福祉、教育などの総合的なサービスと連携を大切にしていく」です。設立の趣意書を見てみると、今までこのビジョンに沿って活動してきたと感じています。

若者への支援とは

若者の支援をはじめるようになったきっかけは、メンタルの方への就労支援で出会った若者たちにあります。二〇一四年から国の委託事業「障がい者職業訓練」を実施し、多くの受講生と出会ってきました。

そして、以下の二つのことがきっかけとなり新しい事業を始めました。

一つは、中学・高校時に発症し二五歳前後になった彼らが「青春らしい青春を送ってこなかった」「修学旅行行きたかったなぁ…」と語ったこと。また、幼いころから母と暮らしていないなど、家族とのつながりが脆弱な人たちが多いことを知りました。中学生、高校生で学校には通っているが、居場所がない、話のできる友だちも少ないという子どもたちに来てほしいと思い、二〇一三年から中高生の放課後活動「いろどり」を始めました。現在六～八人の中高生が集まっています。自分が認められているこの場では、生き生きした姿を見せています。居場所を確保することによって、愛情を知り、対処力が強くなることを目指して続けています。

もう一つは、高校を卒業・中退したけれど、精神疾患や発達障がいの狭間にあることで、病院や福祉の支援対象になっていない人たちに出会ったことです。彼らは卒業後、就学・就労の失敗を繰り返した末、もともとの弱さゆえに、失敗経験を自信や糧にできずに、精神疾患を発症したり、自宅でひきこもる生活状況が何年も続いて、若者と言えない年齢になり、初めて支援の手が届くという現状にあります。当法人で行っている就労支援事業や、他の福祉施設の就労希望者の中には、疾患や障がいがないのに、「生きる力」が乏しく、社会生活場面に臨機応変に対応できず、ストレスに脆弱である人たちが何人もいました。

かながわプレジョブスクール

このような人たちは、教育機関であれば、学校の先生が支援を行っているのですが、卒業後は何の支援もない中、孤立することになり、彼らの受け皿がないことに教育関係者もジレンマを感じている現状があると聞きます。手厚い支援が必要であるのに現在の医療や福祉の枠組みの中で支援を行うのは難しく、受け皿がないのが現状です。

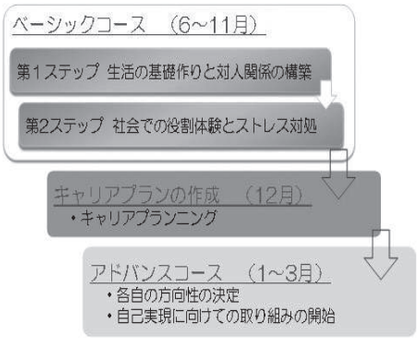
そこで「かながわプレジョブスクール」を提案しました。この事業で目指すのは、医療でも障がい者福祉でもない立場で、手厚い教育支援を一定期間受けられる場を提

供することによって、彼らの「生きる力」を育て、社会での生活を送るための基盤となることです。プレジョブスクールでは、自分自身の「アイデンティティ」を確立させる仕上げの学校をイメージしたプログラムで運営することにしました。職業訓練校が職業の技術を習得するのに対し、ここでは対人スキルやストレスへの対応力・耐性を身につけることを中心にし、本人の「生きる力」を確立させ、その上で就学・就労へ導くことを目指すことを目的としました。事業は神奈川県との協働事業です。教育、労働機関など、県のいろいろな所を巻き込み、繋がりにくい人たちを繋げていくもので、資金はかながわボランタリー活動推進基金２１協働事業負担金の援助を受けています。私たちは県の青少年課と教育委員会高校教育課と協働してこの事業を実施しています。

開校にあたって

昨年六月、「かながわプレジョブスクール」として開校しました。対象者は「将来が不安で一歩を踏み出すことをためらっている若者」とし、新聞の報道を見た方など一六人の応募がありました。コースの到達点としては一年を四つに分けて、生きる力を個の到達点として取り組み、結果として就労や就学、復学につながることをめざしました。「生きる力」とは、①自分の強み弱みがわかる、②対応する力がつく、③問題解決ができる、④他人を思いやることができる、⑤自己決定をして自己実現ができる、です。

コースの概要



第一ステップでは、「生活の基礎作りと対人関係の構築」を目指してきました。遅刻・欠席がほぼなく、参加率が八九％であることは、本人たちが一番驚いているという発言がありました。「朝を感じられるようになった」「生活リズムが整ってうれしい」「睡眠が安定してきた」などの自己評価が聞かれました。彼らは決してひきこもりなのではなく、行く場がないだけということを示しています。対人関係の構築を意識したバーベキューの場では、今まで体験したことのない場面での初体験の多さを物語る感想が聞かれました。そしてこれを機に、グループでの活動において役割分担が自然になされるようになってきたり、無口な青年が共通の趣味の話題に積極的に加わる姿勢が見られたり、休み時間に一緒にプラモデルを作ったりなど、「楽しみ」を他者と作り出すことができるようになっていきました。

第二ステップでは、「社会での役割体験とストレス対処」を目標にしました。社会での役割としてとらえた「日常の家事に関すること」「服装に関すること」等については、実践を取り入れながら進めていきました。カレー作りを一カ月に一度実施し、食事作りの基本を学びました。一回目はお米を何分間もとぎ続けていたり、水もいれずに炊飯器にセットしたりする人もいましたが、何度も作る体験をすることで、スムースに出来るようになり、次第に家でも作るようになる人もいました。また、「介護施設でのボランティア」や企業の協力による「職場体験」を実施しました。社会の中でのコミュニケーションや、自分自身のストレス、そして対処法、問題解決などを座学として取り入れ、座学での学びと、実践での学びを融合させたプログラムが役に立ったようです。

第三ステップでは、個別の今後に向けた活動を行いながら、プログラムでは他者と協力して何かを作り上げることを意図しました。プログラムではグループで相談しながら行う内容や、具体的な問題に対しての問題解決を考える内容を中心に行いました。グループでのプレゼンテーションやプレジョブのＣＭ作りでは、第二ステップまででは決して起こらなかった「他の人と相談する場面」や「自分の意見を話す場面」、「得意な部分を役割分担して行う場面」が多く見られるようになっていきました。

共同制作であるＣＭ作りのプログラムでは、「泣き顔が次第に笑顔になる映像」、「曇り空が青空になる映像」、「あきらめなければ何とかなるというストーリー」などが盛り込まれ、皆がプレジョブに通う中で感じた事が反映された作品が出来上がりました。

卒業式では個人の成果発表のプレゼンテーションを行いました。プレジョブでの変化、プログラムの感想などを来賓の方々の前で発表しました。開始時は下を向いて何も話さず、挨拶もせず、進路も決まっていなかったＡさんが、プレジョブに来る前のひきこもりの生活から、職業訓練校への進学が決まった事を誇らしげに、堂々と話している姿は本当に印象的でした。また「今は仕事が決まっていないが、いずれは仕事が出来ると思うと安心する」「不安はあるけど、ここでの事を生かしたい」「問題が起こっても、一度気持ちを整理すると落ち着くことが出来るようになった」など、それぞれの変化を自分の言葉で語った姿は非常に印象的でした。

成果と課題

事業の成果を数字で表すと表の通りで、対象者がプレジョブスクールを経て次の場を決定するという結果が得られ、目標は達成できました。しかし一年で「生きる力」が満たされたわけではありません。今年度は新規に「フォローアップクラス」を開いて、引き続き支援していきます。また、昨年度は一六人の利用者でしたが、今年度は二クラス、三〇人の方に利用していただけ

三ページに続く

使信

「家族物語の変容」

石倉夕子

アブラハムは多くの日を重ね老人になり、主は何事においてもアブラハムに祝福をお与えになっていた。アブラハムは家の全財産を任せている年寄りの僕に言った。「手をわたしの腿の間に入れ、天の神、地の神である主にかけて誓いなさい。あなたはわたしの息子の嫁をわたしが今住んでいるカナンの娘から取るのではなく、わたしの一族のいる故郷へ行って、嫁を息子イサクのために連れて来るように。」僕は尋ねた。「もしかすると、その娘がわたしに従ってこの土地へ来たくないと言うかもしれません。その場合には、御子息をあなたの故郷にお連れしてよいでしょうか。」アブラハムは答えた。「決して、息子をあちらへ行かせてはならない。天の神である主は、わたしを父の家、生まれ故郷から連れ出し、『あなたの子孫にこの土地を与える』と言って、わたしに誓い、約束してくださった。その方がお前の行く手に御使いを遣わして、そこから息子に嫁を連れて来ることができるようにしてくださる。もし女がお前に従ってこちらへ来たくないと言うならば、お前は、わたしに対するこの誓いを解かれる。ただわたしの息子をあちらへ行かせることだけはしてはならない。」

（創世記二四章一～八節）

美しい物語？

今日の聖書箇所が含まれる二四章は、アブラハムの生涯における最後の課題が果たされたことを語っています。それは息子イサクに嫁を迎えるということです。この「イサクの嫁取りの物語」は文章的にも整った長い物語です。そして信仰的にも美しい物語とされています。

そしてこの箇所は結婚を控えたカップルに対して、信仰に裏打ちされた結婚のあるべき姿、夫婦のあるべき姿、家庭のあるべき姿を伝えるために使われるテキストでもあるようです。よく言われるのは「この結婚を決めた人々（ラバン、ベトエル、イサク、リベカ）は皆、主なる神様の御心を求め、それに従う信仰を決断した」「自分の結婚を、相手との生活を、主なる神様の御心に従うという信仰の決断において受け止めることこそ結婚が本当に祝福されたものとなるための唯一の条件」ということです。この中身に関して詳しく語るには時間が無いので別の機会にしますが、ただひとつ、このように読んでしまうと何が起きるのか。それは「離婚」ということに対して罪悪感を持たせてしまうことです。これは大きな悲劇です。いづれにしてもこのイサクとリベカの結婚のお話を理想の結婚や家庭生活のあり方として読んでしまうことは、このテキストの本筋から大きく外れてしまうと思っています。もう一つのよく語られることは「信仰の父」アブラハムをたたえる話です。これは今日読んでいただいた箇所から導き出されるようです。アブラハムが、今住んでいるカナンの地からではなく、故郷からイサクのパートナーを迎えようとしたのは、「信仰者として生きる」ためだと言うのです。この時の信仰者というのがクセモノなのですが「信仰者とは神の導きに従って、神が示す地へと旅していくことが信仰の本質。そういう意味で、信仰者はこの

二ページ続き

るよう企画しました。その際、年齢によって体験や目標に違いがあることを加味して、年齢別にクラスを分けることにしました。一方、課題として残ったのはどこにも繋がれないでいる対象者にこの事業を知ってもらうことです。現在、今年度開始に向けて募集中なのですが、応募者が少なく苦慮しているところです。（二〇一六／六／三〇まで募集）今後については、課題をクリアするとともに神奈川県との協働事業であることを利用し、様々な機関とのネットワークを生かして、利用したい方がハードルを感じることなく利用できるようなモデルに仕上げていく予定です。応援よろしくお願いいたします。

（まとめ　宮崎祥司）

えーとねえ

妹の璃世ちゃんが寝返り出来そうで出来なかった時期のお話。

美宇（実演しながら）「ほら、璃世ちゃん、こうやるんだよ！」

（とっても素敵なおねえちゃん　郭美宇　四歳）

地上において常に旅人であり寄留者。地上のどこかに定住し、そこの住人になってしまうことはない。イサクがカナンの地の人間になってしまうことを避けるため、地上では旅人、寄留者としての信仰の歩みを貫くため」であるという解釈です。ある注解書には「イサクがこれからこの地の人々とうまくやっていくためには、その人々の中から嫁をもらったほうがずっとよい。しかしアブラハムはあえてそれをせずに、遠い故郷から嫁を迎えることによって、信仰者としてこの世に生きる姿勢をはっきりとしめした。」とあります。私個人は今日のテキストからこれらのことは全く読み取れないのです。「地上では旅人、寄留者」これはキリスト者にとってなんとも言えない信仰者としての響きを持っているらしいのですが、この様な信仰の在り方によって先程の「離婚」に罪悪感を持つということと同様に、現実のこの世でどれだけ大変な目にあったとしても「天国」を仰ぎ見ることで、その大変な現実に甘んじてしまう、そのことを牧師が勧めることになるのです。

弱小民族の知恵

私は今日のお話からこれらのことを導き出すのはとても都合の良い読み方だと感じています。今日のテキストはあくまでも弱小の民族が生き残るための策を、美しい物語仕立てにして編集したものだと思います。この物語が編集されたのは、前回の箇所同様バビロン捕囚期以降です。まさにバビロニア王国の中で在バビロニア外国人、それも自分の国を失った難民として生活する中で、二世三世と世代を経るごとに、一族の独自性を失うという危機感があったのではないでしょうか。同族内、特にいとこ同士の結婚が一族の独自性を守るのに重要な手段であったのです。今日読んだテキストにもそのことが如実に現れています。「地上では旅人、故郷は天にあり」という信仰的な話では語りきれない、そんな綺麗事ではない民族の実情が語られているのです。小さい寄留の民すなわち他国に生活基盤のある外国人が、自分たちの文化を尊重されない痛みをかかえるということです。そしてこれらは聖書の時代の話ではなく、現実にこの日本で起こっていることなのです。

今日のテキストはこのような事情を抱えたイスラエル民族の歴史がかいま見えるテキストです。もう一つ今日のテキストはアブラハム契約が元にあるお話です。これは一つの共通の祖先(アブラハム、イサク、ヤコブ)を持つという歴史物語、血縁に基づく物語です。これは男性中心のお話になりがちです。今日の話の中のリベカも自分の意思で決断したかのように書かれてはいますが、やはりアブラハム契約の犠牲者です。このアブラハム契約はこの後、申命記、エゾラ・ネヘミヤへと引き継がれていき、ある種の「国粋主義」の基盤となるのです。

今日言いたかったことは何ですかと問われると聖書を素直に読んではいけないということになるのですが、前半の部分から、今日のところは聖書は読み方によっては、現状に甘んじ、現状を受け入れさせるための言葉になってしまうという危険があるということです。リベカにとってはまさにそんな物語ではないでしょうか。

まど

◆特集記事を編集しながら、息子のことを思った。境界型の発達障害との診断を受け、中学時代なかなか、居場所を見いだせなかった。長いトンネルを這い出し、全てを受け入れられ、いま生きる力を育んでいる。当事者だけではなく、それを見守る親も辛い。この特集記事がそんな人々の光になれば・・。エールを送りたい。◆かつて伝道所の在る寿町は「地図にない街」だった。権力者にとって不都合な事実だから。先月の熊本地震で、ある局のニュースで意図的に川内原発周辺の地図を示さなかったと聞いた。見ていないので真意の程は分らない。地震の震源地から約一五〇㎞離れている川内原発。一五〇㎞も離れているから心配ないと言いたいのか。私には触れてほしくない現実だからとしか思えない。(石倉)

編集後記

公の制度からもれてしまう若者の支援に奔走する仲間の話を聞いて、大きな刺激を受け、身の引き締まる思いでした。いろいろな困難を抱える人たちが少しでも生きやすい寛容な世の中になるよう、少しでも努力していきたいと改めて感じました。(祥)